

特集

美術を拡げる

建築の技術と志

時代に応える美術館のつくり方

宮城県美術館



TODA BUILDING

芸術の表現手法や作品そのもののあり方が大きく変遷、多様化している。鑑賞から体験へ、創作の先にある発信へ。芸術文化施設や美術館は、そうしたすう勢に回答を求められている。取り巻く現状と未来を見据え、より開かれた芸術文化施設をいかに成立させるか。まちのシンボルとして美術館はどうあるべきか。従前の物差しでは測りきれない価値観に根差し、美術館が新たな時代を拓こうとしている。建築の技術と強靱な大志がそのトライアルに伴走する。

アート表現の多様化に 呼応する施設

日本大学理工学部教授
佐藤慎也氏



アーティストの顔を写し取ったお面に、来場者が思い思いに工作する参加型作品の展示。

つくり方も検討する必要があると
いうことでしょうか。

これまでは整然と並べられた作品を視覚的に観るといって鑑賞のカタチが定着していましたが、例えばリレーショナルアートでは、作家以外の人が創作に参加することもあります。その場として、従来の美術館では展示室を利用せざるを得ませんでしたが、展示に特化したホワイトキューブだけでは間に合わない。例えば床にクッション性のあるシートを敷いたり、空間自体の居心地を良くしたり、人が活動することに対して適正化が図られた空間が

必要になっているということです。

どこまでが作品か
作者は誰なのか

先生は二〇二二年に全面建替えを経て開館した、八戸市美術館の館長も務められています。同美術館を事例にもう少し詳しく教えてくださいいただけますか。

当館の大きな特徴は建物の中央に「ジャイアントルーム」と呼ばれるパブリックスペースを備えていることです。この文字通り巨大な部屋を取り巻くように、「ホワイ

美術館の変遷やあり方について、日本大学理工学部建築学科教授で、芸術文化施設の建築計画が専門の佐藤慎也氏にお話を伺った。

表現の多様化に追隨する
美術館

芸術や文化の表現のあり方が多様化しています。その推移とこれを公開、展示する装置としての芸術文化施設の関係性について、整理していただけますか。

芸術文化施設の象徴ともいえる美術館は、絵画や彫刻という「モノ」を鑑賞するための施設ですが、一九七〇年代に、表現を空間自体と関連付けて作品として昇華する、ランドアートやインスタレーションといった手法が登場するようになります。特定の場所や空間の特性を活かそうとする、いわゆるサイトスペシフィックな作品が台頭しました。

静止した「モノ」から動作や行為といった「コト」も表現の一環になっていきます。

更に一九九〇年代になると、関係性を重視するリレーショナルアートの顔面を写し取った無垢のお面をたくさん持ち込んで、そのお面に来場者がその場で自由に工作するという参加型の「作品」を「展示」しました。制作のプロセス、個性豊かなお面が壁面を埋めたその景観は、一つの作品といえるでしょう。では、この作品の作者は誰なのか。来場した皆さんが集合体として作者になるのか。そうしたことを考える稀有な機会にもなつたはずですが。来場者には鑑賞者としてだけでなく、つくづくる側にもシフトしていきたく、という潜在的な思惑があります。



日本大学理工学部建築学科 教授
八戸市美術館 館長

佐藤 慎也 Shinya Satoh

トが注目を集めるようになる。制作過程に作家以外の人が参加して、美的な関係性を創造することで完成する作品です。そうしたタイプの芸術作品が増えてきた。時代によって表現方法や作品の形態が変化し、これらを展示する施設である美術館が変化を求められるのは必然といえるでしょう。

白い壁と床を備えた直方体の展示空間、ホワイトキューブももちろん必要で、そこで鑑賞の質を重視した作品展示を目指すことは美術館として前提になりますが、加えて表現の変化に対して、美術館はどうあるべきかを考えなければならぬ時代になっていきます。

作品に対して受動的に鑑賞するだけではなく、作品の制作過程に能動的に関与するための展示空間の



(写真：阿野太一)

新しい美術館像を体現する八戸市美術館は、2022年度のJIA日本建築大賞を受賞した。設計は西澤徹夫氏、浅子佳英氏、森純平氏の3名(右)。ジャイアントルームは多様化する表現に最大限応える仕様となっている(左)。





八戸市在住のアーティストが来館者とかかわりながら多様なアート作品をつくり上げる企画(左)や、アーティストのピアノに参加者が動きを重ねるパフォーマンス(右)など、参加型のプロジェクト実施に力を入れている。



一方、安全性や音響、更に汎用性や柔軟性といった機能も求められるのではないだろうか。ジャイアントルームには四つの箱型の収納棚があり、これがレールの上を自由に動くことができます。展示面として活用することもできる。カーテンも可動式でこれらの設備によって大きな空間を一度に全体として使うことも、分割して活用することもできます。可変性が重視された空間です。吸音材を壁面などに多用して、一〇〇人ぐらいでマイクを使ったトークショーを開催しても、響きすぎることはありません。ホールよりはライブハウスのような音の環境で、残響によるストレスは最低限に抑えられています。ただ広



昨年3月、3人制バスケットボールのプロチーム、八戸DIMEが美術館内に設けられたコートで華麗な技を披露した。

術館の主要なコンテンツになっている。そうした作品の展示を通して、市民の共感を得られていることも、八戸ならではの効果だと感じています。一方で、従来型の有名な作品展示を追求する美術館のあり方を支持する方々がおられます。建築物としての外観も美術館らしくない、工場のようなだという意見もありました。そうしたご意見はとても興味深く、傾聴に値します。昨年はプロの地元バスケットボールチームにジャイアントルームを貸し出して、三人制バスケのエキシビジョンマッチを開催しました。美術館でのスポーツイベントは新鮮で、迫力があると好意的な反応が大半でしたが、報道が独り歩きしてしまつて、疑問を呈する地元新聞への投書が少なからずあつたことも事実です。それでも来館者は試合の前後にコレクション展のエリアに足を運び、市民が美術に触れる機会にもなつた。そうした経緯が美術館のあり方を考察する一つの問題提起にもなつたと捉えています。

一方、安全性や音響、更に汎用性や柔軟性といった機能も求められるのではないだろうか。ジャイアントルームには四つの箱型の収納棚があり、これがレールの上を自由に動くことができます。展示面として活用することもできる。カーテンも可動式でこれらの設備によって大きな空間を一度に全体として使うことも、分割して活用することもできます。可変性が重視された空間です。吸音材を壁面などに多用して、一〇〇人ぐらいでマイクを使ったトークショーを開催しても、響きすぎることはありません。ホールよりはライブハウスのような音の環境で、残響によるストレスは最低限に抑えられています。ただ広



ジャイアントルーム(上)と連続するように配置されたパフォーマンスも可能なスタジオ(下)。館内にはジャイアントルームを核としてホワイトキューブをはじめとする個室群が有機的にレイアウトされている(写真:阿野太一)。

展示面として活用することもできる。カーテンも可動式でこれらの設備によって大きな空間を一度に全体として使うことも、分割して活用することもできます。可変性が重視された空間です。吸音材を壁面などに多用して、一〇〇人ぐらいでマイクを使ったトークショーを開催しても、響きすぎることはありません。ホールよりはライブハウスのような音の環境で、残響によるストレスは最低限に抑えられています。ただ広

更新し続ける美術館のあり方
開館から三年を経て、課題として感じておられることはありませんか。八戸市美術館が一九九〇年代以降の芸術の潮流に込められているという自負はあります。当館には一九七〇年代に市内の中学生たちが作成した優れた版画などの作品も収蔵されていて、人気のあるコレクションになつていきます。市民の皆さんが創造した多くの作品が、この美

大なスペースということではなく、随所に創意工夫が凝らされています。展示施設を熟知した設計者が学芸員と協議をしながら構築した、これまでにない展示空間といえるでしょう。一方で自然光もふんだんに降り注ぎ、厳密な温度湿度の管理は困難です。貴重な収蔵作品や美術作品の「展示」には相応しくない。それでも市民や地元の子どもの手による絵画の展示には対応できます。多くの作品が巨大な空間に並べられた展示の光景はインパクトがありますよ。



最も本格的な展示室であるホワイトキューブは、高さ5mの仮設壁でレイアウトは自由自在。展示によってがらりと雰囲気が変わる。



(写真:阿野太一)

するにあたって忘れてはいけない視点とはどのようなものですか。多くの設計者にとって美術館というビルディングタイプは神聖視されていて、一度は手掛けてみたいものといえるでしょう。展示のための大きな箱が内部空間にあれば、外観を含めてその全体を自由に設計することができ、設計者として自己表現の自由度が高いと捉えられがちです。しかし、実際は設備も含めてとても複雑で、難易度の高い建築物です。芸術を視覚的に提示するという前提に立ち、設計者の表現要素を極力排したシンプルな空間を模索するという考え方もあるのではないのでしょうか。劇場やホールとは異なり、美術館建築をプロフェッショナルがコンサルすることは多くはありません。当然のことですが、設計者や施工者はあくまで美術館が美術に触れるための場だという認識を持って、その目的を達成するためにどのような空間、建築物が求められているのか。アートの表現が変化し続ける、その推移に対応できる建築物だとしても、そうした根本的な認識は持ち続けるべきだと思います。

巨匠の意志を継ぎ 県民の想いを紡ぐ

宮城県美術館



長らく県民に愛されてきた宮城県美術館。日本のモダニズム建築を牽引した前川國男氏による設計。建築物自体が一つの「作品」ともいえる仙台のランドマークだ(提供:宮城県)。



株式会社大宇根建築設計事務所
大宇根 弘司 Hiroshi Oune

としての活用も想定して県民ギャラリーを地下一階に配置することにした。今回のリニューアルで、その構想が現実のものとなります。県民ギャラリーは、県民によるグループ展などに活用する重要な展示室だが、そうした将来を見据えた当時の設計方針が、リニューアルの大きな目的の一つである展示面積と収蔵

スペースの確保に奏功したという。大規模改修に向けたもう一つの眼目が、子どもたちを芸術の世界に引き込む機能だと言葉を続ける。「木を切ったり粘土をこねたりしながら作品をつくることで、子どもたちが美術と触れ合える創作室を置きました。しかし、広さ的にも制約があった。今回、美術館として子どもたちに手を差し伸べる機能を、更に充実させたいという県の意向に応えるため、キッズ・スタジオを新たに設けます」。

「キッズ・スタジオ(仮称)」は、「県民ギャラリー」とともに中庭に隣接する講堂を改修した空間に集約される。大宇根氏は、小中学校に

杜の都に建つ モダニズム建築の至宝

杜の都、仙台の青葉山に抱かれるように建つ県立の美術館がある。RC造(一部SRC造)、地上二階、地下一階、四つの展示室のほか講堂、創作室、図書室などを擁し、明治時代以降現代までの日本画、洋画、版画、彫刻など外国作品も含め約七、三〇〇点の作品を収蔵する、宮城県美術館だ。明るい黄土色の外装タイルに覆われた重厚な美術館が濃い緑に映える。竣工は一九八一年、設計は日本の近代建築の巨匠、前川國男による。このシンボリックな美術館が竣工から四〇年余りを経て老朽化が進んだことから、移転・新築が検討された。しかし、現在の美術館の文化的価値を再評価し、方針を変更。現地で改修を施し、その姿を維持しながらリニューアルされることになった。背景には建築物としての価値はもろろんのこと、長年にわたって県民に愛されてきた施設であったことがある。昨年六月に休館し現在、大規模な改修工事が行われている。

観ることと護ることを
両立する施設

おいて、美術や音楽などの授業が縮小傾向にあることを憂いながら、美術館が芸術教育の一端を担うことの重要性を強調する。

言うまでもなく美術館は、収蔵する作品や史料を棄損することなく未来に引き継ぎ、同時に県民に向けて開示し、芸術に触れる機会を提供

日本モダニズム建築の至宝の一つとして一九八三年にはBCS賞にも輝いた宮城県美術館。その設計に前川國男建築設計事務所のチーフとして携わった、(株)大宇根建築設計事務所の大宇根弘司氏にお話を伺った。設計当初から課題となっていたのは、想定を超える速さで展示作品や史料が増えていくという現実だったという。「経験を積まれた有能な学芸員の方が多くおられて、財産ともいえる作品をストックするアーカイブ機能と質の高い展示の両立をとくに模索していました。そこで将来的には作品の収蔵スペース

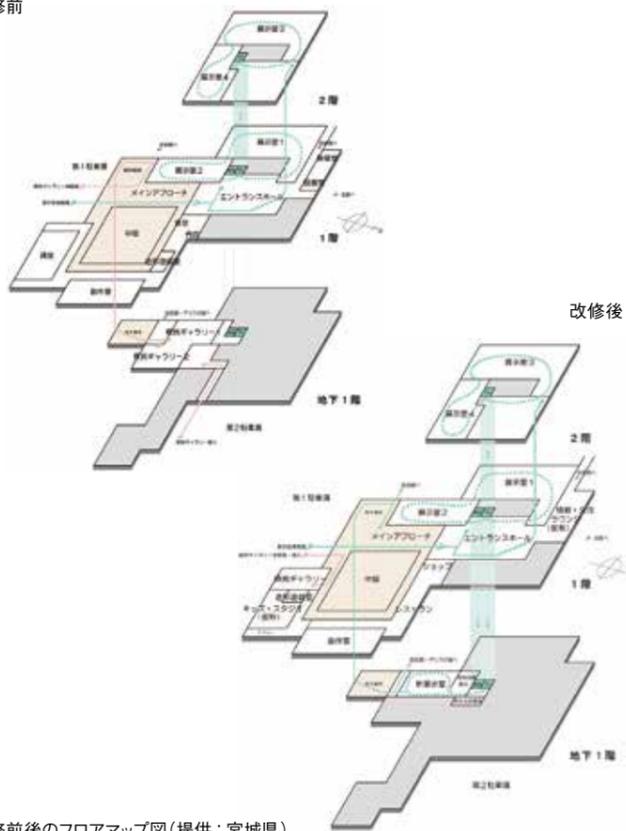
する使命を担っている。この二つのミッションを同時に達成することは容易ではない。

作品を無秩序に公開することはできない。一方で、開かれた美術館としてアトラクティブな姿勢も求められる。大宇根氏はこう語る。「美術館の使命は作品や史料の保管と展示。これは大前提として変わりません。窓から光をふんだんに取り込む開放的な空間は、鑑賞者には歓迎されるかもしれませんが、作品



宮城県美術館のエントランスに向かう動線にも美術品が配置されている。左手の樹木や白い柱も「作品」。仮囲いで大切に覆われ施工には細心の注意が払われている。

改修前



改修前後のフロアマップ図(提供:宮城県)。

の安全性を保つためには障害になる。温度や湿度を厳格に管理し、遮光性の高い閉鎖的な空間も、同時に求められます」。

その困難さと重要性を最も強く認識しているのは、貴重な作品や史料を預かり後世に引き継ぐ役割を委ねられた学芸員だ。同設計事務所との渡邊太海代表取締役もこう付け加える。「今回は施工中であっても館内の温度湿度は一定に保たれるよう、開館時同様に厳格にモニターしています。施工中、別の場所で管理されている収蔵物を再び館内に戻したときに影響がないようにする。そうした強い意志は学芸員に共通するものです。我々はその志に応えていかなければなりません」。

楽しく鑑賞できる。収蔵物を護



株式会社大宇根建築設計事務所
代表取締役
渡邊 太海 Futomi Watanabe

の拡充を図る。建築物内部には屋上防水、雨水配管を施し、外壁や内装の改修、外構の床タイルやサイン、照明器具の更新などを実施する。仙台市青葉区の施工現場を訪ねた。建物内部で分散するように更新箇所の施工が行われている。現場の指揮を執る橋本店の須藤崇次長が施工に向けた意気込みを語ってくれた。「かつてわが社が建設にかかわった地元のシンボルである建物、しかも前川先生の手による重厚な建築物の改修に携わることは、特別な経験でとても光栄に感じています」。



展示スペースを確保するために既存の構造を改造する。この間も館内の温度湿度などの環境を詳細にモニターしている。

る。その比重はそれぞれの美術館の運営方針や学芸員の思想によって異なるのかもしれない。そのポリシーを学芸員と共有して、設計に当たることが重要だと大宇根氏はこう指摘する。「美術のあり方が多様化しており、その潮流に合わせる空間が求められています。ここでは基本的に展示史料の安全性を担保する、同時に鑑賞する人が楽しめることを大切にしています。これをどう実現するか。設計者の腕の見せ所だろうと思います。ただ単にインパクトのある、メディアの衆目を集める建築物を建てようとするのではなく、その美術館の、学芸員の意図を理解してカタチにするという基本を守る大切が大切です」。

美術館ならではの現場管理

宮城県美術館のリニューアルに向けた設計者の想いは、現場にも受け継がれている。渡邊氏はこう話す。「前川先生の想いの詰まった仕事、宮城県美術館は長きにわたって県民の方々に大事にされてきました。その思想をいかに崩すことなく



株式会社橋本店
美術館リニューアル改修工事
次長
須藤 崇 Takashi Suto

しかし、「作品」ともいえる建築物の改修は容易ではない。既存の構造の間隙を縫っていかに資材を搬入するか、その工程一つとっても創意工夫が求められる。その象徴になるのが講堂の改修だ。階段教室のように傾斜がある部屋に鋼材を渡して床版を打ち、フラットな状態にしたうえで「キッズ・スタジオ(仮称)」と「県民ギャラリー」を新設する。社内のBIM専属の部署と緊密に連携してデータを作成し、現場全体で共有して緻密な工程管理を行っているという。

更に、展示室や収蔵庫のコンクリートの打設にも美術館ならではの配慮がある。コンクリートは、打設した直後から、ギ酸やアルカリ性ガスが放出され、これが美術品に悪影響を及ぼす。その懸念をいかに払



講堂を改築して現在の造形遊戯室を更に発展させたキッズ・スタジオ(仮称)を設ける。子どもたちの美術に対するイメージを大きく広げる場となる(提供:宮城県)。

生かしていくか。無造作に新しい材料や工法を導入すればいいというものではありません。今現在の姿を可能な限り忠実に残していこうという理念は現場と共有しています」。

改修工事を担うのは、四〇年前の新築工事にも参画した(株)橋本店だ。施工に当たっては、設計者と施工者双方が当時の工事資料や経験者の助言を俎上に載せながら検討を重ねているという。

今回のリニューアルでは、子どもたちの豊かな美術館体験を創出する「キッズ・スタジオ(仮称)」や、



傾斜のあるシアター形式の講堂は鋼製の梁を渡してフラットにする。既存躯体が複雑に交差する狭隘な現場の施工には、BIMを導入して工程を子細に検討した(左画像提供:橋本店)。

拭するか。「ガスが完全に検出されない段階で引き渡す、『シーズニング』を厳命されています。施工が輻輳する現場で、コンクリート打設のタイミングを慎重に見極めなければなりません。美術館の施工には、そうした独特の制約がいくつもあります」。材料の選定をはじめ、施工手順などは設計サイドや学芸員と綿密な協議を繰り返しながら施工を進めているという。「打合せをするたびに学芸員の皆さんの何があっても作品を護るという責任感と緊張感がひしひしと伝わってきます。美術品に関しては我々は素人です。その助言を全面的に信頼して、施工に反映させることを旨としています」と須藤氏は気を引き締めています。

改修工事は、来年度中に完了する予定だ。竣工後はこの地における芸術の殿堂として、新たな歴史を刻みはじめる。須藤氏は「地域の建築物は地域で大事にするという気概が、日ごとになくなっていく。この建物を収蔵物同様『作品』と捉えて後世に伝承していきたいと強く思っています」と話してくれた。



地階では収蔵庫の一部を「見える収蔵庫」として公開する。新鮮な鑑賞体験ができる展示スペースを目指している(提供:宮城県)。

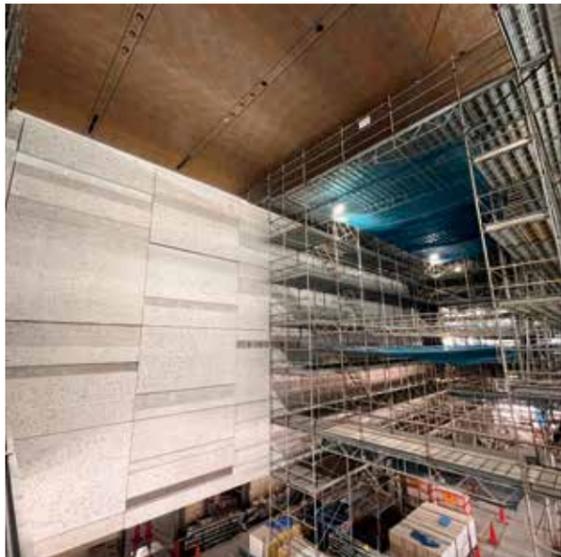
地階の収蔵庫の一部をガラス越しに見ることができるよう「見える収蔵庫」の新設に加え、展示室と収蔵庫

人とまちをつなぐ アートを核としたエリア開発

TODA BUILDING



屋外の広場と建物のエントランスが連続するイメージを演出。開かれた複合アートスペースの入り口がこれまでのオフィスビル概念も大きく変えることになる。



2階共通ロビー吹抜け部の施工状況。

ルでオープンした。TODAビルとミュージアムタワー京橋が建つ街区は「京橋彩区」と名付けられ、シナジーを生みながら芸術文化の拠点として今秋から新たなまちの歴史を紡ぎはじめる。

アートを包含する オフィスビル

TODAビルの一階から六階は多彩な表情を見せる芸術文化の複合施設。中央通りから二〇分セットバックした広場に連なるエントランスロビーは、新進アーティストによるインスタレーション作品などを展示する場となる。二階にはレスト

京橋に生まれる 文化芸術の新拠点

戸田建設(株)が東京の京橋で二代目の本社ビルを完成させたのは一九六六年、中央通りに広い間口を持つ横窓のオフィスビルだった。この建築物が半世紀余りの時を経て今秋に「TODA BUILDING(以下、TODAビル)」として現地で生まれ変わる。地上二八階、地下三階。八階〜一二階が同社の本支店フロア、一三階〜二七階はオフィスとしてテナントに貸し出される。このTODAビルのコンセプトは「アート&ウェルネス」。低層部の一階〜六階にアートイベントやパブリックアートが展開される広場やエントランスロビー、都市型ミュージアムやギャラリーなど芸術関連の



戸田建設株式会社
戦略事業本部 国内投資開発統轄部
統轄部次長 兼 京橋PJ推進部 部長
小林 彩子 Saiko Kobayashi

ランを誘致し、ロビーを見渡す回廊が設けられる。三階は複数のギャラリーがテナントとして入居するギャラリーコンプレックス。四階にはホールとカンファレンスを配置し、六階にメイン施設となるソニー・クリエイティブプロダクツ(株)が運営するミュージアムがオープンする。

TODAビルにおける一連のアー
トプログラムは「ART POWER
KYOBASHI」の名のもとに展
開される。現代アート、工芸、建築、
ビジネスといった広範な分野の専門
家をアドバイザーとして招聘し、新
進アーティストやキュレーターによ
るパブリックアートを更新しながら
発信し続ける。そうした計画全体を
推進するのが、施設管理者である戸
田建設だ。「この施設は収蔵作品を
持たない現在進行形の施設といえ
ます。企画によっては、パブリック
アートの展示がエントランスロビー
のイベントと連動することもある
でしょう。可能性は未知数。個々の
展開や全体の運営をしっかり認識・
共有し、構築していくことが私たち
の使命です」と小林部長は話す。
そのスキームのなかでこのビルを

施設を集積し、オフィスフロアでは安全、快適なワークスペースを構築する。

プロジェクトは新社屋建設の枠を越えて街区の開発事業となっている。ここに至る経緯を、プロジェクトを統括する小林彩子部長にお聞きした。「社屋の建替えは二〇〇八年頃から計画されていましたが、この事業は一五年以上にわたるプロジェクトになりました。時を同じくして、お隣のブリヂストン美術館を擁する永坂産業(株)のビルの建替え計画も進行していて、二者で連携した街区開発を模索していこうということになり、勉強会や協議を重ねる過程で『芸術文化の拠点づくり』と『地域の防災力強化』を掲げ、都市再生特別地区制度を活用した一都市計画二事業としてスタートしました」。特区の提案が東京都から認可され、容積率は大幅に緩和されることになった。

戸田建設が施工を担った隣接する永坂産業の「ミュージアムタワー京橋」が二〇一九年に竣工。ブリヂストン美術館は「アーティゾン美術館」と館名を変更してこのビ
気軽に訪れて、日常的にアートと触れ合うことができる施設にする。ビルの顔となる一階部分について、設計部門には広場とエントランスロビーがつながる構成を要請したという。「建物の内と外を全面開放することは現実的ではありませんが、可能な限り屋内がパブリックスペースの延長になっているという印象を強調してほしいと。従来のオフィスビ



3階のギャラリーコンプレックス。



5月下旬の現場の様子。左隣のビルはミュージアムタワー京橋。

知名度が低い。「京橋」というキーワードをネット検索すると、大阪市の京橋がヒットすると苦笑しながら小林部長はこう語る。「これまで京橋は自らの魅力を有効に訴求できていなかったのだと思います。東京駅周辺の大手町、丸の内、有楽町、いわゆる大丸有とは異なり、多種多様な業態の企業や事業者が個々に活動している。そのために、点と点がつながり、線となって、更に面として広がる、そうしたフローを生むことができなかつたのかもしれない。その停滞を打破するのがART POWER KYOBASHI、アートによるエコシステムだと自負しています」。例えばまちづくりの視点

芸術文化の拠点づくりを軸とし

**芸術文化から生まれる
まちの価値**

からも、京橋界限では個々の企業が賑わいの創出や災害時のBCP対策に取り組んでいるが、この点的な施策が連動することで、まちの力は格段に向上するはずだ。今回の芸術文化の拠点づくりを契機として、大丸有を含めた製造業や不動産、地下街、鉄道といった多彩な事業者とのエリアマネジメントの連携がはじまっている。小林部長は更に多くの企業を巻き込んで、京橋の成長を加速させたいと意気込んでいる。



TODAビルは1階床下に免震層、上部構造には独自の連層耐震壁(コアウォール)を配置した免震構造。広場は災害時に避難者の一時滞留エリアとして開放され「芸術文化の拠点」でありながら「地域の防災力強化」も約束する。ZEB Readyの認証取得をはじめ最高レベルの環境性能と耐震性能を誇る同社が有する技術の集大成といえる建築物だ。

た京橋の再興を目指す一方で、民間企業として経済活動との整合性も担保されなければならない。小林部長はこう説明する。「理想的には、TODAビルのコンセプトに共感してくださって、入居を決めたテナントからいただく賃貸料をアート事業の原資とするという考えですが、現実的にはこのビルの足元にアートがあるという環境が、リーシングに寄与するとは言い切れず、テナントにとっては、やはり立地とコストが判断基準になる。アートという未知数の新規事業に向けた初期投資はユニークで、短期的な回収は容易ではない。それでも長期的な視野に立てば、芸術文化が誘因となっ

て京橋全体の資産価値を向上させ、収益をもたらすことができると思っています」。その言葉から、芸術文化の振興に立脚した経営の持続性というもう一つのエコシステム、循環構造が垣間見える。計画が立ち上がった際、その運営方針について、社内でもバトルに近い協議が繰り返されたことも事実だ。小林部長はそうした過程を経て、舵を切ってくれた経営陣に感謝していると心中を明かす。

京橋で人とアートがつながるART POWER KYOBASHI。芸術文化をコアに据えたかつてないスキームによって、新たなまちづくりが始まろうとしている。



八重洲通りと中央通りの交差点に、隣接するミュージアムタワー京橋の空き地と連続する広大な「広場」が出現する。1階には貢献施設としてアートショップ&カフェも併設される。



計画地周辺を回遊するように、歩道空間が整備される。

**アートが誘発する
まちの活性化**

なぜ今ゼネコンがアートと接続

ルのエントランスは用事のない人は入らないし、入れない。ここでは点在するパブリックアートに誘われるように入館する、そんな仕掛けを演出します」。供用空間を生かしたパブリックアートの展開は、来街者や来館者に新鮮な刺激をもたらすだろう。TODAビルを起点として、従来のオフィスビルのイメージが変わるかもしれない。

しようとするのか、改めて小林部長に聞いた。「建設業とアートは、親和性が高いと感じていました。ゼネコンのなかには作品のコレクションに努めたり、アワードを開催したり、独自の博物館を有する企業もあります。はつきり申し上げて戸田建設は後発。私自身ももとは設計の人間です(笑)。それでも、だからこそ既成概念にとらわれないこととなく、芸術文化を核とした都市開発、まちづくりができるのではないかと考えました」。確かにものづくりを信条とする建設業界の精神は美を追求する芸術文化の世界観と重なる部分がある。戸田建設が一二〇年を超えて拠点とし続けてきた京橋は江戸時代から職人街、ものづくりのまちとして発展してきた。今も古美術商や画廊が集積する通称「骨董通り」は健在だ。芸術文化の発信拠点となるポテンシャルは、非常に高いと小林部長は確信している。

そのポリシーに基づいて構築されたのが「アートによるエコシステム」だ。アーティストの創作を支援し、発表機会を創出する。その作品を発表する場と機会の提供、更に作品の販売やレンタルを通して利潤をアーティストに還元し、その地位の向上を図る。この三つのフェーズが永久運動のように循環することで、結果として京橋の新たな文化的価値、ひいてはまちの資産価値を生み出す。このシステムは、アートを中心に据えた都市の生態系だ。

日本橋と銀座を両脇に抱える京橋エリアは、よく言えば落ち着いた大人のまちだ。その反面、全国的に

アートによるエコシステムの構築



ム」だ。アーティストの創作を支援し、発表機会を創出する。その作品を発表する場と機会の提供、更に作品の販売やレンタルを通して利潤をアーティストに還元し、その地位の向上を図る。この三つのフェーズが永久運動のように循環することで、結果として京橋の新たな文化的価値、ひいてはまちの資産価値を生み出す。このシステムは、アートを中心に据えた都市の生態系だ。

日本橋と銀座を両脇に抱える京橋エリアは、よく言えば落ち着いた大人のまちだ。その反面、全国的に